2004年 2 月

# 共（響）存的と Shugyou（修業-行）文化

高　師　昭　南

# Co（or Echo）-Existence and Shugyou（修業-行）Culture

Akinami TAKASHI


## Abstract

"This real environment in which I live is half my body! Only through humbly listening to this real environment's voices, can I totally be myself as a perfect man!" "I am composed of me and this real environment. If I don't rescue this real environment, I can't be rescued". These are the words of Jose Ortega y Gaset on the environment, his warning against the traditional occidental humanism that considers human being as the lord able to dominate everything on the earth.

I want to describe his thought as 'cultural intellect', in contrast to humanistic way of thinking 'civilization intellect'. I call this also 'co（or echo）-existence', because this indicates co（or echo）-existence on the level of deeds that animating the others reciprocally inspires him, like voluntary activities.

I understand the main purpose of culture is as ethical deeds and human relationships and this cultural intellect. Then, through what mechanism or system had this central culture spread into the people in Japan in earlier times? I think It was through Shugyou（修業-行）practices or system as a social or religious educational program. Of course those who have practiced Shugyou may not be conscious of their practices as cultural intellect. But when we hear their words such as 'Iron is alive' or 'we must listen to the clay's voices', giving full play to one's natural ability, we can be sure that there is cultural intellect.

Recent shocking murder cases show the lack of ethic and that intellect. This decline is due to denying or keeping Shugyou culture at a distance by viewing it as a feudal practice, without examining it, without any equivalent, for only pursuing profit, dominance, and freedom without responsibility, or ethics.

If we seek contemporary happiness, we must establish 'co（or echo）-existence,' referring to Shugyou culture as our authentic guide in the first place.


## はじめに

身近なことで私たちが美しいと感動することの一つに、修業を積み洗練を加えた板前の包丁さばき、身の運び方がある。

この場合の「美しい」には、奇麗という表現とは違って、目的的で利己的感情に縛られる日常がそ

の手前で折り返してしまう世界の向こうにある高度の倫理感と秩序感への賛嘆が込められている。

ところで、何が人間にとって幸福かと考えた場合、そうした社会は、硬く言えば倫理、つまるところ人間の生きる基本、を身に付けた人々が多く居ればいるほど実現すると答えざるを得ないだろう。この頃、人もマスコミも「キレル」「ムカツク」「（人が）壊れる」という表現を安易に口にするが、そうした表現や風潮自体が、キレル人間、ムカツク人間、壊れる人間を創り出していく現実が見えないのだろうか。ここには、その中核が空洞化し倫理の崩壊した病んだ文化の姿がある。辞書を引くと、「文化とは、その土地に伝承された生活様式や行動様式そして価値観の総体である」と出てくる。その意味では、流行現象であればなんでも文化の名でよぶ現在の傾向は間違っていない。しかし、文化の文化たる所以は、何代にも渡って培われてきた人間の生活の知恵である。文明は、知恵がなくても生きられる利便性の世界を作ってきた。培われる何も必要としない代替可能な交換性の社会を作り上げてきた。不幸というのはここにある。鳥は飛べないのである、風の抵抗がなければ、ましてや飛ぶ意志がなければ。かつては、実感としてある生きる上での困難や抵抗を克服しようとする姿勢が知恵を生んできた。さらには、主体的に抵抗を設定することで、知恵を制度として維持してきた（それが修業-行文化である）。今は、その実感的抵抗が掴めない、見えにくい難しさもあって、倫理観、秩序観として結実してきた人間の知恵や意志が、言ってみれば存在の座標原点としての文化が失われようとしている。だが、知恵や意志が無くていいわけがない。なぜなら、それは生きる姿勢そのものだからである。

このところの日本は、もうかつてのように「世界で最も安全な国」などとは呼べない状態になっているが、警察官を増強して済むだけの問題ではない。生きる姿勢、いってみれば文化の問題が大きいと考えねばならない。「ムカツク」「キレル」と言っても、誰もその人と自分を傷つける表現を注意しない。子どもが使うと親までそれに便乗して調子を合わせる時代である。表現としてある人間の生きる基本といった観念がほぼ無くなってきている。しかし、それで人間は生の実感をもって生きられるのだろうか。

虚の抵抗の自覚に基づく、知恵や意志の時代に入ったのである。自ら主体的に抵抗を設定しなければならない時代に、はっきりと入ったのである。伝統は、私たちがその上に新たなものを加えることで、知恵や意志を、つまり生きる姿勢を培ってくれる母胎である。かつての実の抵抗に基づく知恵や意志を修得する社会的教育プログラムであった修業を、今後の存在の座標原点としての文化を考える必須の参考事項とし、研究する意義がここにある。修業を積み洗練を加えた板前の美しさを見る喜び、味わいに相当するものを私たちにもたらす文化を創造するためにも。

## 第Ⅰ章　時代のモード

### １　生活感の希薄化

高度成長を成し遂げた70年代（この頃より、欧米に少なく日本に顕著な「ひきこもり」が社会問題としてクローズアップされ始めてくる）に震源をもち、若者に強く共感されたメッセージに、歌手佐野元春の「へんな大人になるのはやめよう」があるが、対抗文化の衰退にともない、それはただファッションとして、「大人になるのはやめよう」として浸透していった。招来したものは、今日の中年層にまで広がるモラトリアム状態である。

その「大人になるのはやめよう」症候が、「幸せになりたい」症候と合併症になっているのが今日である。そのことをこれから少し見ておきたい。

今（2002年）の若者に将来何になりたいか、聞いたことがある。年配者には奇異に思われる答えが返ってくる。対象は大学２年生であったが、30人中４人から「お金持ちになって、幸せになりたい」という答えが返ってきたのである。別段、家庭環境その他特別な学生ではない。むしろ、ごく普通といった方がいい学生である。この答えが特殊でないのは、他の人の答えにも、ニュアンス的に近いものが多かったのである。「サラリーマンでない自由な職業に就いて、……」というのが次に多かった。具体的に、何々（または何々分野）という答えは、無いに等しい。

答えにおよそ共通しているのは、自由や幸せな将来を希望しながら、生活感が希薄で、努力過程への自覚がまるで伝わってこないということである。

「歌は世につれ、世は歌につれ」という。歌の世界を見てみよう。一昨年の『Dearest』に続いて2002年のレコード大賞に輝いたのも、同じく浜崎あゆみ、『VOYAGE』であった。歌詞は以下のようである。

僕達は幸せになるために　この旅路を行くんだ
ほら笑顔がとても似合う
色褪せることなく甦る　儚く美しき日々よ
眩しい海焦がれた季節も
雪の舞い下りた季節も
いつだって振り向けば　あなたがいた
僕達は幸せになるために　この旅路を行く
誰も皆癒えぬ傷をつれた　旅人なんだろう
ほら笑顔がとても似合う
僕達はこの長い旅路　果てに何を想う
誰も皆愛求め彷徨う　旅人なんだろう
供に行こう飽きる程に

いうまでもなく、多くの人の共感を得た証としてレコード大賞である。だが、何が共感を呼び起こしたのであろうか。もちろん彼女のファッションや歌の同時代的リズムがあろう。その他、（この曲では、「幸せになるために」のフレーズが二度、同じ意味に近い「愛求めて」を加えるなら、三度出てくるが）その年のポップスのヒット曲の歌詞らと突き合わせてみると「幸せ」という言葉が多く、「幸せ」が時代のキイワードとして、若者の潜在意識にアピールしたのではないかと推測される。精神分析すれば、「幸せになるために」は、プラスされている「旅路」と一対のものとして作用していると言わなければならないかもしれないが。

いずれにしても従来ならば結果的状態とみなされる「幸せ」が、目的視されているのは先の大学生と同じである。生活感が無いのも同じである。生活感や「努力」は演歌ぽくてダサイとして、関係の外にあるのはわかる。わかるし、同時代的仲間意識もわかるが、自立につながる「生きる姿勢」を呼び起こす何も無いのも事実であろう。

「生きる姿勢」については、註が必要であろう。生きる姿勢とは、身を挺して支えるゆえに支えられる勢いを内に秘めた生き方である。たとえば、人情とは人情に生きるということであり、人の立場や気持を察してその人を生かすべく身を挺して（時とすれば、我が身を犠牲にして）生きる生き方で

ある。

ところで、最初に、70年代に「ひきこもり」が社会問題としてクローズアップされ始めたと述べたが、今日の「幸せ」願望には、ともすれば「幸せにならなければいけない」強迫観念をうかがわせて、外に一般化した「ひきこもり」の様相を見せている。そこには、生きる姿勢を失い、自己を肯定する場を失って、キッカケさえあれば操作欲求の暴発に身を任せる危険性を抱えている人間の姿がある――最近の事件の低年齢層化、病理化は一連の問題である。抵抗が見えにくくなった（「虚の抵抗」を見つけなければならない）現在の悲劇を一瞥しておきたい。

## ２　「人が壊れるのを見てみたかった」

2000年12月、新宿でビデオ店に爆弾を投げ込んだ若者の言葉であるが、最近の特に若者の事件に特徴的にみられる動機は、この「人が壊れるのを見てみたかった」という一語につきる。モノなので、そこに「痛み」はない。ここには倫理が崩壊した文明の病が透けて見える。

相手に「生あるもの」を感ずれば感ずるほど、相手を殺すとなればそれだけ心理的抵抗がある。だが、モノ化出来てしまえば、心理的な抵抗は少ない。ボタン一つで原爆を投下、何千人を一度に殺すことが出来る時代である。

根源的な文化的活動欲求は、操作欲求と共（響）存性であるという自説を私は持っているが、上にふれた現在に特徴的な事件は、操作欲求の、共（響）存性との分極相補性が壊死状態でおこる現象であると私は見ている。だが、共（響）存性つまり自己を肯定するものを失った人間の補償は、つまるところ操作欲求の快楽としての実現である。そのためには、相手を対象化し、モノ化する必要がある。が、それは自己をモノ化する自己疎外の危険な企てでもある。殺人を繰り返すうちに「何とも思わなくなる」というのはこのことである。

生あるものの本来は共（響）存性、つまり響きあうというところにある。見る、聞くという表現は主体が単に刺激に反応していることを示すに過ぎないが、芸術の位相である見入る、聞き入るは、そこに生れてくる響きをききつつ、自己が響いている状態である。惹き込まれつつ、それを自分の「歌」にして行く（*１）内部的行為である。一見スタティックでモラトリアムに見えるこの状態の実は、ふれあいを喪失し、したがって響きあうを失うモラトリアム状態に陥入退却しないで、外に開かれた自己を確定しているダイナミックな生の状態（生きる姿勢）である（*２）。

ところが現在、人は情報処理機構に飲み込まれ、刺激や情報処理の機械と化して、〈待ち〉を契機とする成熟の時間たる見入る、聞き入るから隔離されつつある。

人や環境を支配し、操作する人間の心の空しさは特に歴史に題材をとった悲劇のテーマとしてたびたび登場してくるが、それは他者をモノ化して響かなくすることで、響きあう世界を自ら締め出している結果としての響きのなさなのである。悲劇は知恵としてこのことを警告してきたが昨今、悲劇がはやらないのは、こうした知恵から我々と今が見放されていることを示している。共（響）存性が矮小化され、身を挺して支える知恵を失なった我々が今、環境を支配し操作することに躍起になっているのは当然の帰結といわねばならない。そして、責任を負う（それは身を挺して支えることである）ことを教えずただ競争に勝つことばかりを教える現今、歯止めを失った攻撃本能が、内に向かっては自殺を、外に向かっては人を人とも思わない殺人へとエスカレートしているのも当然の帰結と言わねば

ならない。

生活と生命を支える文化を失うということは、他者をモノ化することで自己疎外に陥り、生きる姿勢を失しない、愛つまり自己を肯定する場を失うことにほかならない。無機質的な最近の事件は、自己を肯定する場を失った人間の暴発する操作欲求と言えよう。

## 第Ⅱ章　他者という私の半身

培われた知恵や意志（生きる姿勢と言っても同じであるが）としての文化を失うことは、「生きられる生活世界」を喪失することにつながる。「生きられる生活世界」とは、メルロ・ポンティが用いた概念であるが、ここではわかりやすく「生きられる生活世界」という表現で、「自分が何かによって支えられ、息吹きを貰っていることに感謝している生き方を示す」とする（＊３）。そしてそれは、その自分を支えてくれるものの存在を認めその「声」に耳を傾け、そのものが生き生きと成るようにするとき、ボランティアがそうであるように、かえってこちらが生き生きと成ることを知る知性である。今から90年近く前にこの問題の重要性に気づいた思想家がいる。スペインの生んだ思想家オルテガ・イ・ガセットである。オルテガの思想を哲学者中村雄二郎は次のように解説している（＊４）。少し長いが、分かり易い文章であり、本論にとっても非常に重要な理解であるので、抜粋引用（「」内がオルテガの言葉）させていただく。

精神的・文化的機能が同時に生物学的機能であり、……つまり文化はまた同時に生の法則である……・。……・

「人間は、自分を取り巻く環境について充分な認識を得たとき、その能力の最大限を発揮する」。環境は控えめで、自己主張することはない。「環境！ Circum-stantia！われわれのすぐ周囲にある寡黙なものたちよ！」。それらはわれわれのすぐそばで、捧げ物をもらってもらうことを熱望している。

ところが、これまで人類は、明白な目標に突進するばかりで、この慎ましい〈乙女〉の熱望を少しも顧みてこなかった。「人びとは、遠い彼方の何かのために戦い、通りすがりに、かぐかわしいスミレの花を踏み潰して」いったのである。

その上オルテガは、この環境をもって人間の半身だとしている。いわく、「私を取り巻くこの現実の領域は、私という人間の他の半身なのだ！この領域を通してのみ、私は私自身を完全なものとして、全面的に私自身となることができる」。彼の場合、このような文脈において、「私とは、私と私の環境である。私がもし私の環境を救わなければ、私自身は救われないことになる」が言われたのである。

自然や環境を分析、操作する対象と理解する西欧従来の文明的科学的知性に対して、警告を発し、新たな文化的知性のあることを告げたのがこのオルテガの言葉である。

オルテガの「私を取り巻くこの現実は、私という人間の他の半身なのだ！この領域を通してのみ、私は私自身を完全なものとして、全面的に私自身となることができる」という言葉は、また自立の真の意味に言及したものと解釈することもできる。そう解釈するとき、それは培われた知恵や意志とイコールであり、とりもなおさず生成力としての本来的な文化の姿を定義するものと言える。

我々は日常、語感として文化と文明を区別している。語感差異は、「生活」に果たす機能の相違への直観に由来すると思えるが、ここの区別は「生きられる世界」を考える上でのコンプレックスを解

くためにも非常に重要であると思われる。この問題を含めて、私が文化をどう考えるかを以下明らかにしておきたい。

私は、文化とは社会に伝承されてきた、他者（以下、他者という言葉で、人（俳優にみるように時には自分自身が人=道具、素材となる場合もある）・素材、道具、場、事柄を示すとする）を生かすことによって自らを生かす生活や行動の様式であり、分かり易い言葉を使えば、使いこなす、着こなす、住みこなす等「こなす」技術の学習、上達を通して、生活をスムーズにさらには生活を主体的に「味わう」工夫の数々であると考える。生きられる世界の質を作り深めつつ、そこに生きる技術であり、身体的には、そのことによって生き生きとするところの姿勢の創造である。

「こなす」技術の学習、習得にはそれなりの手間、暇（時間)、そしてなによりもその他者を大切にする心が必要となる。しかるに文明は、機能性（利便性）を旨として、「こなす」苦労をなくして、迅速にかつ容易に「用事がたりる」ようにしていく、つまりその手間、暇を省くところに本来がある。が、ついでに他者を大切にする心も奪ってしまう場合が少なくない。結果、便利だけれども、他者を大切にする心があって作られる自分を活かす力、「味わう」術を失う危険性を孕んでいる。

文明が進むにつれて、なによりもクローズ・アップされてきたのはお金。便利が欲しいとなれば、それを手に入れるためにお金が欲しくなる。ここに人間はお金に呪縛され、お金の下僕となっている現状がある……。ミヒャエル・エンデが小説『モモ』や地域通貨で言わんとした非人間的な、殺伐とした世界へと舵をきってきている現代社会の動向がある。

と、読んできて読者の中には待てよと思う人がいらっしゃるかもしれない。他者を生かすことが自分を生かすこととどう関係があるのかと。この競争社会にあって他者を支配するあるいは操作することこそ、自分を生かすことになるのではないかと。この点は根底となる重要ポイントでもあるので、前章２項の内容と重なるが、更に詳しく説明しておきたい。

生命と身体は、先ず振動体としてある。生命と身体は、生物物理的には響き合うというかたちとしてあるということである。証左として、音（振動）の聞こえない世界では，人は苛立ち、やがて気力を失っていくことが分かっている。コミュニケーションがないとは、こうしたことを心理的社会的次元で問題とした表現であるが、そこにあるのは共振し得ない、つまり響きあえない関係、響きあう生命と身体を持たない自己疎外の問題であり、アイデンティティ崩壊の現象である（なぜならば、コミュニケーションする身体こそがアイデンティティの核であるからである)。

人は支配し操作することを欲するが、それは人に自己を認めさせることではあっても、先に述べたように、他者をモノ化することで自己の半身たる他者を失うことに他ならない。人は他者に存在を認めてもらうことで、自分を肯定し、「生きる姿勢」をつくりあげることができるのである。

文学で「響き合う」という表現に出会うが、それは単なるメタファーではなく、まさに生命と身体の共振現象であり、互いに存在を肯定し合い、「生きる姿勢」にあることを、自らが生成した「生きられる世界」にあることを示している。

では、相手を生かすことで自分を生かす仕組み、つまり共（響）存的としてある文化とはどのようなものなのだろうか。その最たるものが修業（行）の文化であり、その種としての型の文化であった。

“マスコミの製造する事実”と副題のついたダニエル・ブーアスティン『幻影の時代』[(＊５）はイルージョンに陥りやすい現代のイメージを問題にして、人々は事件を待望しマスコミもまたそれに

答えて事件を製造する欲求に身を任せる傾向にあること、現代では経験と見識が必ずしも重要視されず従って偉大と有名の区別があやふやになってきていること、更に現代人は理想について語らず専らイメージを問題にする――理想つまり人間がそれに向かって意志的に努力する目標を敬遠し、他人や社会がどう見るか、自分がどう見えるかという多分にナルシスト的感覚的な生活スタイルをとるようになってきていることを挙げている。ベンヤミンの機械技術による‘複製’の観念と組み合わさって支配的なのが、利益社会の文化だとするならば、経験と見識を重要視し、理想と意志的努力を大切とする社会は共同社会ということになろうが、その共同社会の文化が修業（行）の文化であり、型の文化であった

## 第Ⅲ章　修業（行）という名の文化

「しゅぎょう」とは、一人前になるための技術と精神の訓練をさす。何事によらず物事には基本というものがあると観念して、より優れた、より充実した基本をめざす世界である。その契機となるのが、モデルであり型である。ここでは、基本は、到達点にして次の出発点となっている。一般に宗教世界のそれは修行、それ以外は修業の字を当てる。ただし現実には、修業であっても、修行と書いてある場合が見られるが、それらはおおむね深い精神性の必要を強く意識した場合の表現である。

一人前とは広義には給金をもらえる段階をさす。狭義には、その分野のことなら何によらず相手の注文を受けて立つことのできる域に達した者をさす――それを「風」とか「流」とか表現したりするが、自分の型を持つことを許された段階である。

さて本章は「しゅぎょう」の持つ文化性に言及するものであるが、修業と修行に通底するものを主に問題とするので修業（行）の表現で統一して、論を進める。

### 1　社会的教育プログラムしての修業（行）

今日では「半人前」という言い方は、封建的な差別に響くのだろうか、一般にはあまり使われない。「一人前」という言葉も姿を消しつつある。が、かっては一人前という言葉が、よく使われた。前提としてそこには、課せられる厳しい修業があった。

「粘土練り三年、轆轤で五年、十年かかって一人前」、日本料理の世界でも「〈気働き〉十年、やっと一人前」、人形浄瑠璃の世界でも「足遣使い三年、左遣い五年、主遣いで十年、やっと一人前」というわけである（*6）。

プロとしての職人（芸人）の世界だけの話ではない。

アマチュアという違いはあるが、村の若者には、男にも女にも若者宿の制度があり、女なら一日に何反と決められた布を織るなどの修業過程を含むイニシェィションの儀礼が課せられていた。〈卒業〉して、初めて一人前、結婚も認められると言うことになる。今の成年式とは大分違う。

漫画の世界でも昔と今では大分異なる。孫悟空でもなんでも昔のスーパーマンには、修業（行）による能力獲得の過程があった。今のスーパーマンにはない。

少なくとも日本おいて前近代と言われる時代には、修業が社会の隅々まで浸透していたことの一端にふれたが、西欧の文化、文明が雪崩れをうって入り込む近代になると様子が変わる。モデル、先人を「写し」て生きる生き方から、オリジナル志向がだんだん強くなる。かつては制約を設け、それに挑み越えるところに自由を見ていたが、制約なしの自由を欲するようになる。結果、能力としての自由という観念が希薄化していく。修（業）行とか、「一人前」というのは、共同体が生きていた時代

の話であり、一人前として社会的認知を受けられなければ、人がまともにその存在を認めてもらえなかった過去の時代の概念と言うこともできよう。そうした時代が基盤としていた第一次産業の時代は過ぎ去り、時代は工業化社会から情報化社会へと様変わりしているのに、修業（行）や「一人前」でもないだろう、そういう言葉自体いかにも旧弊、時代遅れの感を免れない、と言うことになるかもしれない。

結果、その是非を議論することもなく、「一人前」という言葉が姿を消していく。だが、言葉が失われることは、それが担ってきた文化や知恵が姿を消すことにつながる。「一人前」に限って言えば、「十年で一人前、気働きがそれなりに出来るように成る。年月がそれくらいかかるが、それが人生と職業の基本なんだよ」という知恵を失うことになる。ともない、自分がそのために努力する自立のための里程標、目安が読めなくなる。代替するものも見出せずにである。

現在は、社会的認知なしに人が安易に生きられる時代である。が、それはまた先に見てきたように認知において享ける「存在」感という生の中心を、人手に渡してしまう危険な状況である。いきおい、ただ存在感を求めて、操作の快楽に逃避する傾向を生むこととともなる。

メルロ・ポンティは「我々は身体を通して世界に住むようになる」と言った。山崎正和は、一歩進めて、「我々はリズムを通して世界に住むようになる」と言った（＊７）。もちろん、ここで言うリズムとは、デジタル的時間の刻みのことではない。仕掛けとして時間の刻みを設けつつそれを受動的能動性において乗りこなす技術であり、生きられる世界の質である。かつての教育、つまり修業は、制作性という本義においてそうした技術訓練の場であった。

その文化性は特に、修業を修めた人々の「鉄は生きものです」「漆は生きている」という声に聞くことができる。「自然素材の側からの働きかけに感応しつつ腕をふっている」のである（＊８）。我々が我々と成るために欠くことが出来ない我が半身として、素材を受けとめている知性の姿を見ることができる。

修業の修行的側面には多分に禅の影響が見られる――修業の初めにして、終わりは、自分たちの学習する場を自分たちで〈掃除をする〉ということである。その時、あえて前に進まないことで生れるしっかりとした人生の奥行きを直感的に垣間見る。〈掃除する〉ことで、基本への感触を得、反復が差異を生むことを身体で知り、「腰」が決まるということを身体で知り、人生の土台が出来上がっていく。その上に、修得すべきことの履修過程が設けられている。そしてそれはそのまま、身分階梯を示すことにもなるが、板前を例にとれば、追廻し（下手間係、雑用係）、八寸場（付き出しの盛りつけの技術を修得する段階）、焼方や揚方（焼き物、揚げ物の技術を修得する段階）、向板（刺身の技術を修得する段階）、最後に煮方（煮物の技術を修得する段階）をへて、真板（板長）となる。料理の世界では、八寸場に入ると給金がもらえて、一応は一人前と認められる。それ以後は、段階段階の一人前があるが、「真板」をとって、初めて一本立ち、およそ日本料理であるならば何によらず客の注文に応じることの出来る、つまり勝負にでることも出来る域に達したとされる（狭義の一人前）（＊９）。こう見てきたとき修業とは、一人前になるための一種の通過儀礼的側面を持っていたこともわかる。

修業文化は、身体性の文化であり、段階段階の技術を修得することが、すなわち型に倣い基本を身につけていくことであるゆえに、型の文化と一体のものである。

## 2　場の力あるいは反復の逆説

では、型とは何か。

今日私たちは普通、型や繰り返しという言葉をマイナスの意味を込めて、「型にはまる」、「同じ事の繰り返し」という言い方で使う。しかし、型や繰り返しを身体的主体的に実践する者にとって、型はそうした無味乾燥なものとは別のものである。一言で言えば、ドゥルズが指摘するほど挑戦的であるかどうか別にして、「反復」「写し」を存在させるなか、制作の次元を拓き、かけがえのないもの「美」を創り出す契機となる。

反復が存在するのであれば、反復は、一般的なものに反する或る特異性、個別的なものに反する或る普遍性、通常なものに反する或る特別なもの、変化に反する或る永遠性を同時に表現している。あらゆる点で、反復とは侵犯（トランスグレッシオン）なのである。反復は、法則を疑わしいものとみなし、より深く、より芸術的な現実のために、法則の名目的あるいは一般的な性格を告発するのである（ジル・ドゥルズ、P21 *10）。

反復こそは、別に才能のない彼等の筆に解放を与えた。技は愈々冴え、見ていると奇蹟が目前に行われている感さえするであろう。殆ど無心にこだわりなく描けるまでに彼等の腕を高めた。その驚くべき速度、その淀みなき手さばき、描くことを忘れつつも描き得たほどの筆の確かさ。凡ては繰り返しを求める激しい労働の賜物なのである。量に交わってこそ益々冴える美しさなのである。多くを作らねはならなかった職人たちの命数への、不思議な報いであるといえないだろうか（柳　宗悦　P241 *11）。

反復を身体的主体的に実践する（修業-行の本体である制作はそのために絶好の機会であるが）ことには、また精神治療的要素も含まれている。文明史家ルイス・マンフォードは現代社会における制作の意味を重視し、今日の我々がいわば社会的心理的治療を必要とする神経症患者――この事実を我々は否定できないであろう――であるとの認識に立って、制作はその造形的な仕事の持つ反復的な性質において治癒の効果を持つと指摘する。

神経症患者に正常な活動と精神の均衡を回復させるために今行われている作業療法が、新石器時代の技法――機織り、塑像作り、大工仕事、陶器制作――を利用していることは、おそらく単なる偶然の一致ではないであろう。これら造形的な仕事のもつ反復的な性質が、人格の不安定で方向づけられない衝動を制御することを助け、結局は、建設的な日課に服したことにたいする心地よい報酬を与えることになる（*12）。

「やって見る」の姿勢において進められる型の反復による制作は、モデルと同調的に深くふれあうなかで、作品の美とそれを作り出す人の姿勢、動作の美を作り出す。市川浩は芸術の制作にふれて、「画家は見ることによって描くとともに、描くことによって世界が見えてくる」（市川浩）、つまり対象と深くふれあうなかで対象が自己の本質「真」を開示するのに芸術家が立ち会うことを述べているが、素材の素晴らしさを生かした、あらまほしきものとしての「美」を賜物とする型の制作との違いとも言えよう。だが、いずれにしても、反復を通してのみ可能な共（響）存的世界を創り出し、深まりゆく味わいを自らの内に反響させる文化的知性の活動であることに違いはない。

型について「スポーツのフォームのようなもの」と言ったのは、板東玉三郎である。イチロウのフォームと松井秀樹のフォームは随分と違うように見えるが、当然おこるであろうこうした疑問に答えるようにして玉三郎が付け加えた言葉は、「個人個人で異なるが、劇に対する共通のメッソードがそこに存在する」というものである。優れた歌舞伎役者、俳優であり、また演出家、映画監督として型の演技とそうでない演技を区別して使用している玉三郎のこの言葉は、これが型である、型とはこういうものであるという実践的悟得に立った言辞である。彼の言葉をヒントに演技、野球、ゴルフなどの体験を通して私が考えていることは、「インパクトの持続的安定的形成を作り為す身体（あるいは身体各部）の基本的運び方と、その序破急において作られる自然の勢い、これが型と言われるものの実質である」ということである。こう考えれば、フォームなどの外形的相違の背後にある「共通」を理解できるであろう。「型とは、目に見えるものではなく、状況に即応してとりえる状況を読む力と身体を行使するにあたっての動的バランス感覚のようなものではないか」（*13）という理解を示したのは、熊倉功夫であるが、彼の理解にも齟齬をきたさないであろう。

改まって、修業（行）文化における型とはなにか。

型とはそれを通せば、一応の形がつき整う、主体的身体に対する仕掛けである。その意味では、鋳型的性格ももつが、それだけではない。規範としての強制力、学ぶべきものとしての保証性ゆえに、反復行為を誘い、粘り強く吟味する精神を養い、微妙の差異感覚と動いてなお崩れない動的バランス感覚を身につけ動作、行動を技化する働きをもつ（*14）。同一的かたちの反復行為ゆえに微妙の差異に気づきつつ、同一的に見える表面の現実の下に、多様の生きた現実があることを身を持って知る仕掛けであると言える。確かに、鋳型的性格ゆえに下手すれば、小さく固定されかねないという意味で両刃の剣ではあるが、日常を超えた風体ののびやかさは型という目標があって初めて創造されるという逆説的真理の見極め（制作知）において立つ修業（行）文化の仕掛けである。

## おわりに

文化の中心的課題は、倫理であるが、人をモノや機械のように扱う最近の事件は、倫理の欠落した今という時代を如実に反映している。長年にわたって培われてきた生活の知恵つまり文化は、人間のあるべき姿を礼儀や行儀のかたちで教え、そのかたちを伝統としてきた。違反する者は、「恥」として、共同体を去ることを覚悟し、また共同体はそうした者を受け入れないことを申し合わせにすることを教えてきた。「粋」とは、その洗練された生きる姿勢にほかならず、野暮とは礼儀や行儀のない生き方、姿勢、一言で言えば利己的で他者のために身を挺して生きることのない者を指した。倫理がないとは、つまるところ他者のために身を挺して生きる姿勢のない（過去で言えば野暮な）生き方であるが、文明の発達と勝つことを唯一の価値とする利益社会の競争は、そうした生き方をまさに過去のものとした。文明はもともと頭脳の思想であり、科学がそうであるように全てをモノ、コトという対象に還元して扱う技術思想であり、そこにおいて勝たねばならないとなれば、人をも処理、操作の一対象に還元しなければならない。文化は文明と異なり、身体の思想であり、あくまで相手、他者、素材を活かすことで自らを生かす生き方なのである。

現在は、理想も見識も価値を置かれない。便利か便利でないかということで、多くのことが評価される。役に立つということも当然、近視眼的にならざるを得ない。文明は、知恵なくても知識があれば人が生きられるようにした。結果が、他者のために身を挺して生きる倫理の否定である。響きあう

べく他者を自らの半身として生かす共（響）存的としてある生き方の否定である。

だが、何が人間にとって幸福につながるか考えたとき、それは倫理なくしてはありえない。つまり身体の思想である文化なくしては、ありえない。では、日本の文化はかつてどのようなかたちにおいて倫理を浸透させていったのだろうか。それが修業（行）である。修業（行）は、「清貧」の生き方そして「粋」が価値として評価された時代の実質を支えたものである。それは、人が一人前として社会的認知を得るための具体的な技術の習得とともに、身を挺して生きる覚悟鍛練の場であり、人間一生が修業（行）であるという心の持ちようを教える場でもあった。技術と覚悟の程は、より優れた先人、先輩の生き方、身体の運び方、もののこなし方を基本としてそれを、心の内であるいは身体的に繰り返すことで、吟味し、自分の身丈にあったこなし方等を作り出す作業を通して測定された。現実としては、先人、先輩のやり方に対する尊敬の念なくしてはやっていけない行為である。そこにはむしろ、優れたものを他者の内に確認せんとする積極的な姿勢が自分をつくりあげていることを忘れてはならない。方法論としては、型の文化であることにより、小さく固定されかねないという意味で両刃の剣であるが、日常をこえた風体の伸びやかさは型という目標あって創造されるという逆説の見極めにおいて高度の文化とも言える。

修業の段階はそのまま身分階梯となっていたこともあり、平等思想のもとで、封建的と一蹴される一方、知恵なし形なし勝つことのみが課せられた世界が現出する。要となっていた倫理も放棄された結果が現在の、無秩序に近い心の状況である。

修業や型の文化の衰退には、制作ではなく生産優位の社会へという文明の必然が働いているかもしれない。が、人間にとって何が幸福かを考えた場合、相手を活かしきることで自らを実現していく〈制作〉、あるいは指導者に恵まれれば生命を重ねることで豊かな生を実現していく型の学習、更に進んで、繰り返し繰り返し研究することで無心の位に達して「自ずからあることの品格」にいたる型の習得、また型の習得の過程で身についてくるしなやかな身体のリズム――荒さ、弱さ、複雑に堕することのない持続的で、強くしかも柔軟で安定した身体のリズム、こうしたことはもう一度考えてみてもいいのではないか。

## 註

1　やまだようこ「共鳴してうたうこと　自身の声が生れること」（『コミュニケーションとしての身体』大修館書店　1996年　所収）より表現を借りる。

2　ここでは、刺激が単なる刺激としてではなく（生理的基盤への癒着を離れて）、自己触媒的に増幅し、絶えずよみがえり泉のように湧出する精神の生命力の旺盛に働く信号へと、変化する機構が実現している。

3　メルロ・ポンティは「生きられる生活世界」という言い方で、知覚のポテンシャリティ――行動を遂行し感情を体験するというバランスのとれた身体の二重の能力を介して、対象に「深さ」と「奥行き」を与えつつ、対象の今まで気づかなかった姿を発見すること――が生かされる場を意味した。

4　朝日新聞1994年 4 月 9 日夕刊

5　星野郁美他訳　東京創元社1976年

6　神崎宣武「師弟制度と地域社会の支えた型の伝承」（雑誌『国際交流』81号　国際交流基金　所

収）参照

7　山崎正和『演技する精神』　中央公論社　1994年

8　「　」中は、『職人』（株式会社エス・ビー・ビー編　三交社）P34からの引用

9　３と同じ。

10　『差異と反復』財津理訳　河出書房新社1992年

11　『工芸文化』文芸春秋社1942年

12　L・マンフォード『機械の神話――技術と人類の発達』樋口清訳　河出書房新社

13　「　」は熊倉の言葉ではなく、彼が編集コーディネイターをつとめた雑誌『国際交流』81号　国際交流基金 での彼の型についての見解を私なりに要約したものである。

14　技化するためには、型を「倣う」だけでなく、それを使うモデルからコツを「盗む」力が必要となる。

（以上は、2002年小林勝法・高師昭南の国際学部共同研究費による研究成果の一端である。単独執筆）